

# 「手」に関する比喩表現について

## —— 日本語と中国語における表現の比較 ——

陳 穎 卓

### 1. はじめに

日本語には「手がかかる」「手を抜く」「手を尽くす」などの「手」を用いる慣用表現が多く見られる。中国人日本語学習者としては辞書を利用しないと意味が理解できないことが多い。例えば「手がかかる」について理解するとき、中国語にはこのような表現がないため、かなり難しいと言える。「手がかかる」を中国語に訳すと、<费事, 麻烦>—(面倒である、苦勞する)となる。このように同じ意味を表すとき、中国語は「手」を使わない場合もあるため、中国人日本語学習者にとって「手」を用いる慣用表現を理解することはかなり困難である。そこで「手」が本来の意味を超えて複数の意味へと拡張するプロセスに着目して中国語と対照させながら、日本語の「手」に関する比喩表現を考察していくことにする。

本研究では「手」を用いる比喩表現を認知言語学の観点から分析し、意味拡張のプロセスの究明を目指す。日本語習得及び中国語習得の一助となれば幸いである。

### 2. 先行研究

松中(2002)は、「手」の多義性の分析で認知言語学の観点を導入し、「手」はメタファーとメトニミーを基にした解釈の拡張により、多義が形成されていると述べている。

有蘭(2005)は「手」と「口」を含む慣用表現をメタファー、メトニミー、メトニミーに基づくメタファーと分けて分析を進めている。

楊(2009)は、中国語と日本語における「手」と「足」の意味拡張を認知言語学の観点から分析している。研究の対象は「助手」「話し手」「人足」「売れ足」などの複合名詞である。

土屋(2009)は、認知言語学の観点から「手」と「目」を含む慣用表現を対象に慣用表現の全体的な意味、構成要素の意味、実際の用法に焦点を当てて検討している。

認知意味論の観点から日本語と中国語の対照研究はまだ数少ないと言える。本稿は以上の先行研究を踏まえつつ、認知言語学の観点から「手」が用いられている比喩表現を日本語と中国語を対照させながら分析していく。

#### 2.1 比喩の概念

比喩は大きく分けて直喩(シミリ:simile)、隠喩(メタファー:metaphor)、換喩(メトニミー:metonymy)、提喩(シネクドキー:synecdoche)という四つの分類ができる。直喩は認知言語学の研究対象ではないので、ここでは省略する。提喩については本稿では該当する事例がないので、扱わないことにする。

### 2.1.1 隠喩（メタファー）

メタファーの概念についてまずは認知意味論の発展の出発点となったLakoff & Johnson (1980) を紹介していく。

Lakoff & Johnson (1980) は「メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである」と述べている。

Lakoff (1987,1993) は、メタファーは起点領域と目標領域の間を結ぶ一連の関係からなっているとしている。喩えるものが属する領域を「起点領域」、喩えられるものが属する領域を「目標領域」と呼んでいる。対応関係を「写像」という。

河上 (1996) は「メタファーとは類似性の連想に基づいて、ある対象を、まったく異なる領域の物事に喩えて理解する能力及びそのプロセスを言う」と述べている。

辻 (2003) は、Lakoff (1987,1993) と河上 (1996) が述べている起点領域と目標領域の関係を以下の図1のように示している。

図1に示したように、AとBは異なる領域だが、何か一つ（図の黒い円の部分）の類似点があれば、メタファーが成り立つのである。

「人生は旅」において喩えられるもの「人生」は「目標領域」Bであり、喩えるもの「旅」は「起点領域」Aである。

旅には、始めがあり、中があり、終わりがある。人生もまた始まりと終わりがある。旅は楽しいこともあれば、悲しいこともある。人生も同様のことが言える。このように、「人生」と「旅」は類似点がいくつかあるから、「人生は旅である」というメタファーが成り立つのである。

本研究では、Lakoff & Johnson (1980) 及びLakoff (1987,1993) のメタファー理論に基づき考察を進めていく。

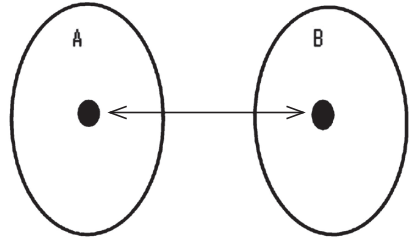


図1 類似性に基づくメタファー (辻.2003)

### 2.1.2 換喩（メトニミー）

Lakoff & Johnson (1980) は、メタファーと同様、メトニミーも私たちの思考体系を形成していると述べている。その中では「製作者で製品を指す」例や「部分で全体を指す」という近接性に基づく例を挙げている。

初山・深田 (2003) は、メトニミーは2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩であると述べている。さらに隣接性について空間的隣接関係と時間的隣接関係に分けて検討している。

谷口 (2003)、瀬戸 (2007) もメトニミーは空間的隣接関係と時間的隣接関係があると述べている。次は空間的隣接関係と時間的隣接関係について詳しく見ていく。

### 2.1.2.1 空間的隣接関係

空間的隣接関係をさらに詳しく分類していくと、図2のようにつながっている関係、部分と全体の関係がある。

図2において、①は二つの事物が空間的に隣接し、つながっている関係にある図である。例としては「鼻をたらししている」があげられる。この場合、「鼻」は鼻そのものではなく、「鼻水」を指している。鼻(A)と鼻水(B)は①のような隣接関係にある。

また②は二つの事物が全体と部分の関係にあるものを表している。例としては「研究室をノックする」があげられる。この場合は「研究室」(A)全体で部分である「研究室のドア」(B)を指すから、全体で部分を表すメトニミー表現である。また、「手が足りないから、手伝って」の句において、下線の部分の「手」は「人間全体」を表すから、「部分全体関係に基づくメトニミー表現」で②に当てはまる。

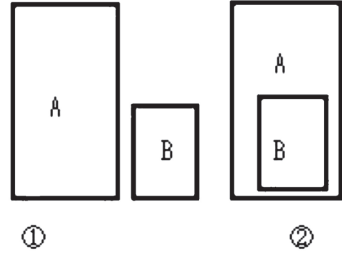


図2 空間的隣接関係の図 (辻.2003)

### 2.1.2.2 時間的隣接関係

時間的隣接関係に基づく例として初山(2003)は「頭を抱える」を挙げている。例文としては「この問題を前にして頭を抱えてしまった」が挙げられている。

初山(2003)によると「頭を抱える」は、字義通りの動作と<困り果てる>という精神状態が同時に生じる場合があることに基づき、慣用的には(動作をとまなわない場合でも)このような精神状態を表すことができるとされている。

またメトニミーの認知的基盤について初山(2009)は、以下のように述べている。

メトニミーは、参照点能力という認知能力に基づくと考えられる。参照点能力とは、私たちが、ある対象(=目標)を把握あるいは指示する際に、その対象を直接捉えるのが難しい場合、別のより把握しやすいもの(=参照点)を経由して、目標の対象を捉える認知能力のことである。

Langacker(1993)は、参照点とはある対象をターゲットとして認識する際、その対象物に到達するための手がかりとなるものであると述べている。この関係は図3のように表されている。

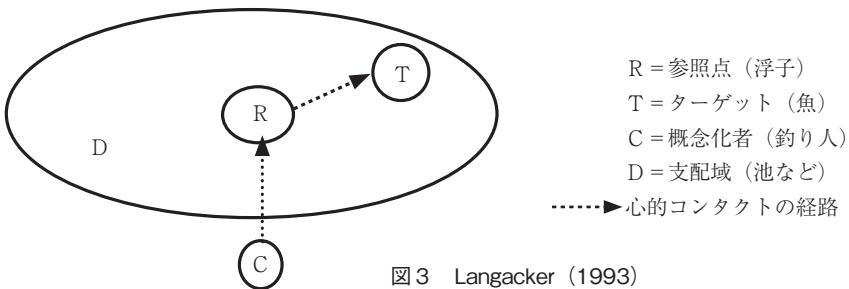


図3 Langacker (1993)

図3において、Cは概念化者、Rは参照点、Tはターゲット、Dは支配域、点線矢印は心的コンタクトの経路を表している。粉山（2009）は、図3を浮子を使った魚釣りとしてわかりやすく説明している。つまり、抽象的なターゲットを水中にいる魚で喩え、われわれが把握したい目標であり、図3のTに当たる。浮子を参照点Rとして、水中にいる魚の様子を知ろうとするわけである。釣りをする人は概念化者Cである。

「手をこまねく」と言う表現で確認すると、この表現が本来表す動作は参照点Rであり、この動作と同時に生じる精神状態である「手だしをせず、傍観する」ことはターゲットTを表しているのである。

### 3. 比喩表現の分類の細分化の必要性

比喩の中にはメタファー、メトニミー、シネクドキーがあるのだが、実際の比喩表現の中ではいずれの事例なのか分類できない場合がある。これまでの研究ではメタファー、メトニミー、シネクドキーのどれかで比喩表現を説明することが多いのだが、一概にはそういう分け方をすることができない場合もある。

例えば、「手をつなぐ」は「仲間になる、協力しあう」として使うことが多く、一見メタファーと思われるかもしれないが、実は最初の段階で、具体的な動作が伴われたので、隣接関係に基づくメトニミーである。徐々に抽象度が高くなり、メタファーの度合いが高くなったのである。従って、完全にメタファーとは判定できないわけである。メトニミーに基づくメタファー表現と考えられる。

このように、従来のメタファーかメトニミーかだけで比喩表現を説明するのは不十分である。本稿は「手」が用いられた比喩表現の分類を細分化し、メタファー、メトニミー以外に、「メトニミーに基づくメタファー」「メトニミーとメタファーの両方が関わる表現」「手が用いられた慣用表現に関わる比喩」という分け方をしていく。

また、本稿では手が用いられた比喩表現の分類を「手」自体の比喩表現と「手」を用いた慣用表現に関わっている比喩表現に分けて整理し、分析していく。

手自体の比喩表現というのは「手」自体が身体名称からほかの意味へと拡張することである。例えば「手」自体のメタファー表現の例として、「手を失う」「それも一つの手」において、「手」は実際の「手」から、「方法、手段」へと拡張する例が挙げられる。つまり、「手を失う」において「手」を「方法、手段」と置き換えられるものである。また「手」自体の比喩表現の中にも慣用表現が含まれ場合もある。

手を用いた慣用表現にどんな比喩が関わるかという例としては、「手を汚す」は「手」自体が「好ましくないことを自ら実行する」という意味へと拡張するのではなく、「手を汚す」全体として意味拡張しているのであり、「メトニミーに基づくメタファー表現」である。

手が用いられた比喩表現を分類する前に、まずは「手」の基本義を確認し、その上で「手」に関する比喩表現を上述した分類法に基づいて分析していく。

## 4. 「手」の基本義と意味拡張

### 4.1 「手」の基本義

「手」の抽象的な意味を理解するとき、まずは「手」の基本義から理解する必要がある。なぜなら、「手」の基本義は具体的な身体部位名称を示しているが、その具体的な身体部位から様々な抽象義が派生し、意味拡張しているからである。以下は「手」の基本義を示す。

『日本国語大辞典(第2版)』(2001)(以下『日国』と略記)は「手」について次のように語義を示している。

①体の上肢、躯幹関節部分から指先までの部分。

②かいな、うでと区別して、手首から先の部分、その全体だけでなく、指、てのひらなどの部分を漠然とさすこともある。

## 4.2 「手」自体の比喩表現

『日国』から「手」に関する比喩表現を抽出し、「手」自体の比喩表現を「手」自体のメトニミー表現と「手」自体のメタファー表現とに分けて分析していく。

### 4.2.1 「手」自体のメトニミー表現

#### (1) 手で方向を表す

- |   |
|---|
| <p>a 山手(やまて)〈「山の手」(やまのて)〉<br/>浜手(はまて)、上手(かみて)、下手(しもて)</p> <p>b 横手(よこて)、手前(てまえ)</p> <p>c 行く手を遮る、道の左手右手</p> |
|---|

aの「山手」は「山の方」、「浜手」は「浜の方、海の方」であり、「上手」は、席次の場合は「上座に近い方」、川の場合は「川の上流の方」、舞台の場合は「観客から見て右の方」の方を指しているから、「手」で手が指す方向を表す「空間的隣接関係に基づくメトニミー表現」だと考えられる。

また、bにおいて手前は「手」で「自分の目の前、手元」を表すから、「空間的な隣接関係に基づくメトニミー表現」であり、「横手」は「横の方向」を表すから、同様の仕組みになっている。

cの「行く手」は「進んでいく方向」を指しており、「左手」「右手」は「手」で「左の方」「右の方」を指すから、いずれも「手」と「手で指す方向」との空間的隣接関係に基づいている。

#### (2) 手で人を表す

- |  |
|--|
| <p>a 読み手、聞き手、語り手、踊り手、借り手、貸し手、やり手、担い手、釣り手、稼ぎ手</p> <p>b 歌手、投手、選手、運転手</p> <p>c 名手、新手(あらて)、助手、副手、相手</p> <p>d 手が足りない、手がない</p> <p>e 苦手</p> |
|--|

上記cの「新手」は①新たに仲間に加わった人と②新しい手段、方法の二つの意味があるのだが、ここでは①の意味として挙げておく。「副手」は「助手」の意であるが、旧制大学では「助手」の下に置かれた。

上記は a～e 全て「手」(部分)で「人」(全体)を表している「部分全体関係」に基づくメトニミー表現である。これらは、人間はよく「手」を使って労働・作業するから、際立つ「手」で「人」を表すようになると考えられる。また、bは「その職業(役割)をする人」と理解できる。これらの職業(役割)はよく「手」を使うことに由来しているのではないかと推測できる。

eは「不得手・不得意」の意で用いられることが多いが、「いやな相手・勝ち目のない相手」としても使用される。ここでは後者の意味として挙げておく。

### (3) 手で傷を表す

手を負う、深手、浅手、薄手、痛手

上記の表現は元は「手に傷を受ける」意である。「手」で「傷」を表す表現であるから、「空間的隣接関係に基づくメトニミー」だと考えられる。

「薄手」は「傷」以外のほかの意味も持つこともあり、「地が薄い」の意味になる場合には、下の項目(5)に入る。

また、「痛手」は「重い傷」以外に「ひどい打撃、損害、心の痛手」と言う意味を持つ。例えば「不況で痛手を受けた」において、「痛手」は抽象的な意味へと転じて、抽象度が高くなり、メタファーと認定される。

### (4) 手で種類を表す

この手のもの、この手の品物、この手は品切れです、その手の話は苦手だ

上記の表現はいずれも「手」でものを指すことから、「手」と隣接関係にあるものの「種類」を表すようになった。「この手のもの」について、松中(2002)は「手」は、一種のシネクドキー的性質を持つものであると述べている。しかし、本研究は「この手のもの」をいうとき、手の指先がその周辺を指すことから「手」を用いたので、「空間的隣接関係に基づくメトニミー表現である」と主張する。「その手の話は苦手だ」は「その種類の話は不得意だ」の意であるが、この場合の「苦手」はメタファー表現である。

### (5) 手で材質を表す

厚手の紙、薄手の茶碗

「厚手」で品質を表すのは手で触って、その感触によって、地が厚いか、薄いかを判断するから、隣接関係に基づくメトニミーだと考えられる。

「薄手」は、「地が薄い」と「安っぽいこと、浅薄なこと」という意味にもなる。「地が薄い」が「安っぽいこと」という意味になると、「薄手」全体の意味は抽象度が高く、メタファーと考えられる。例えば「薄手な内容の本」のような場合である。

### (6) 手で所有領域を表す

入手する、手にある、会社の運命は社長の手に握られている、手に入れる、手にする、手に入る、手に落ちる

上記の表現は具体的な「手」が「所有領域」へと拡張し隣接関係に基づくメトニミーである。

ここでは「手に入れる」において「手」が「所有領域」を表すとしているが、「手に入れる」全体としては「メトニミーとメタファー両方が関わる表現」としても分類でき、後に詳述する。

### (7) 手で筆跡を表す

この字は彼の手に違いない、いい手だ、他人の手をまねる、これは女性の手だ

「手」と「筆跡」は隣接関係にあるから、メトニミー表現である。

## 5.2.2 「手」自体のメタファー表現

手自体のメタファー表現は以下のように分類している。

ア <器具などの手で持つようにできている部分> 例：かごの手、なべの手、ドアの取っ手  
これは「手」の形状と位置の類似性から生まれたメタファー表現である。

### イ <手段、方法>

手を失う、それも一つの手、あらゆる手、最後の手、いつもの手、きつい手、決まりきった手、うまい手がある、いい手、汚い手を使う、いろいろ手を尽くす、この手でいこう、新しい手を打つ、彼の手を見破った、敵の手に乗せられた、その手は食わないぞ、奥の手を出す、手の施しようがない、手を替え品を替え

上記の表現は手でいろいろなことをするから、「手段、方法」を表わすようになり、手の機能によるメタファー表現だと考えられる。「いい手」は前述の「筆跡」を表わすメトニミー表現の場合と「手段・方法」を表わすメタファー表現の場合がある。

### ウ <手数>

手がかかる、手を抜く、手を省く、手が省ける

「手」で「手数」を表せるのも手の機能によるメタファー表現だと考えられる。

エ <世話> 例：彼は母の手ひとつで育てられた、手が焼ける。(世話が焼ける。)

オ <腕前> 例：お手のもの、手が上がる、めきめき手を上げる、いつもやらないと手が落ちる

カ <能力> 例：手に余る、手に負えない

キ <力、助力> 例：手を借りる、手を貸す

上記の手のメタファー表現はアは類似性に基づくメタファー表現であり、イ～カまで、すべて手の機能によるメタファー表現である。これは次の図5に示す。

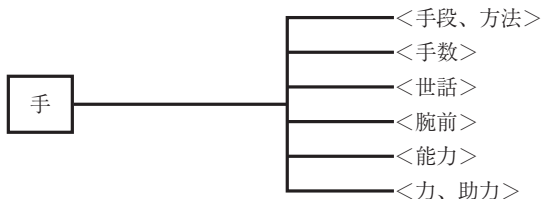


図5 手のメタファー表現

### 4.3 手が用いられた慣用表現に関わる比喩

手が用いられた慣用表現を「メタファー表現」「メトニミーに基づくメタファー表現」「メトニミーとメタファーの両方が関わる表現」、「意味項目別に異なる比喩に関わる表現」の順で分類していく。

#### 4.3.1 メタファー表現

手を焼く、手を切る

これらの表現は抽象度が高く、具体的な動作が直接イメージされない場合は、メタファー表現とされるが、直接イメージされる場合は、次の項目に分類される。

例えば、「手立てがなく、兄弟げんかにはいつもながら手を焼いている。」の「手を焼く」は「取扱いにこまる」として使われており、抽象度が高く、メタファー表現と考えられる。

#### 4.3.2 メトニミーに基づくメタファー表現

- a 手をこまね (ぬ) く
- b 手を染める、手を汚す
- c 手に汗を握る
- d 手を広げる、手をつなぐ、手を引く、手を組む
- e 手を入れる、手を加える
- f 手が詰まる、手が回らない、手が離れる、手が空く、手が塞がる
- g 手を差し伸べる、手を揉む

aの例としては「事業家として手をこまねてはいられない」の「手をこまねく」は「深く考え込む」、「手だしをせず、傍観する」と理解することが多い。「手をこまねく」と言う具体的な動作より、まずこの抽象的な意味が思い浮かぶ。つまり、「手をこまねく」はすでに抽象度が高く、メタファー表現だと考えられる。だが、この二つの抽象的な意味は最初「手をこまねく」と言う具体的な動作があるから、徐々に定着するようになったので、メトニミーに基づくメタファーだと考えられる。この例からも分かるように、このとき、「手をこまねく」の動作性がかなり低くなっており、抽象度が高く、「手だしせず、傍観する」という意味を表している。

bの「手に汗を握る」の例としては次の例が挙げられる。

例：試合はなかなか勝負がつかず、観衆は手に汗を握った。

上の二つの例と同じように、最初は「危ない物事や激しい争いを見てはらはらす」から「手を握る」という動作が連続して起こる。それゆえ、この表現の基盤もメトニミーである。だんだんと、最初の動作がなくても、「緊張する、はらはらす」と表せるから、抽象度が高く、メタファーとなっている。そのため、「メトニミーに基づくメタファー表現」と考えられる。

c～gまでの意味は紙幅の都合により、詳しく論じないが、上述した三つの表現と同様の説明ができる。

最初の動作を参照点とし意味拡張したが、だんだんと抽象的な意味が定着し、メタファー表現となっている。これも初山（2009）の参照点能力の記述を支持している。



### 4.3.3 メトニミーとメタファー両方が関わる表現

「手に入れる」例：権利さえ手に入れれば、あとは簡単だ。

「手に入れる」は「手」自体の比喩表現として挙げていたが、それは「手」が「所有」を表すとき、「手」自体のメトニミーとして分類している。「手に入れる」全体を見てみると、「手」は「所有」を表し、「入れる」は「手」あるいは「所有」を「容器」として見立てるから、メタファー表現である。そのため、「手に入れる」全体はメトニミーとメタファー両方に基づいて意味拡張している。

### 4.3.4 意味項目別に異なる比喩が関わる表現

同じ表現が複数の意味を持っている場合、異なるメタファー、メトニミーが関わっているのである。次に文学作品、朝日新聞の記事（「聞蔵Ⅱ」で検索）から具体的な例を挙げて検討する。

#### (1) 手を打つ

「手を打つ」の派生義は二つある。

① 仲直りする、契約が成立する。例：ころあいを見て手を打つ

② 何らかの必要な手立てをとる。例：もしか本本当ったら困るから、今のうちに手を打つんだ。（『青春の蹉跎』石川達三）

意味が違うと、意味拡張のプロセスも異なる。①の意味として、仲直りするときや契約が成立するとき、よく「手を打つ」と言う動作も伴うから、隣接関係に基づくメトニミー表現によって意味が拡張している

②の意味としては、「手を打つ」という具体的な動作がなくても成立するから、抽象度が高く、表現全体がメタファー表現である。最初は囲碁などでよく「次の一手を打つ」を使うことから、手で方向を表していると言える。つまり最初の段階はメトニミーに基いて意味が拡張している。徐々に意味が定着し、メタファーの度合いが高くなっている。そのため、派生義②はメトニミーに基づくメタファー表現だと考えられる。

#### (2) 手を出す

① けんかをしかける。例：先に手を出したほうが負けだ。

② 物を盗む。例：人の月給に手を出すより罪は重いぞ。

③ 女性と関係をつける。例：若い女性に手を出す。

④ かかわり合う。例：共同事業には手を出すなという父の教えを守りながら、身の丈経営を続けてきた。（『朝日新聞』2011年04月28日）

①の場合、「手を出す」という具体的な動作が伴われる場合が多く、隣接関係に基づくメトニミーによって意味拡張しているが、③の場合は動作がなくても意味が表現できるから、メタファーによって意味拡張している。ただ、動作がある場合もあり、最初も動作があるから女性と関係をつけるという意味になっているから、メトニミーが基盤となっているといえる。意味の定着によって、抽象度が高くなるから、メトニミーに基づくメタファー表現と考えられる。④の場合は、手を伴う動作を伴うことがなく、抽象度がかなり高く、メタファー表現である。

### (3) 手が届く

①力が及ぶ 例：急増する中間所得層にも手が届く価格帯の品ぞろえを充実させ、シェア拡大をはかる。(『朝日新聞』2011年06月28日)

この場合、「手」は「力」を表し、「手」自体のメタファー表現である。「届く」は「及ぶ」のメタファー表現であり、メタファープラスメタファー表現に基づいている。

②世話が十分なされる 例：かゆいところに手が届くようなきめ細かい診療を目指し、「雄勝まごのて診療所」と名付けた。(『朝日新聞』2011年05月25日)

この意味項目は手で世話をすることからきて、メトニミーに基づくメタファー表現である。

③ある段階に達する 例：吉永国光頭取は「12年3月期にコア業務純益を101億円にするという経営計画に手が届く」と手応えを語った。(『朝日新聞』2011年05月14日)

この例において「手が届く」は全体として「実現できる」の意味に拡張しているので、メタファー表現である。

### (4) 手を握る

①仲直りをする 例：「メーカーでは敵同士が手を握ることは常に起きている」。(『朝日新聞』2006年04月26日)

この項目において仲直りするとき、実際に手を握ることも多いが、動作がなくても意味が表せられるのでメトニミーに基づくメタファー表現である。

②提携する、同盟を結ぶ。 例：池袋の東武、西武両百貨店は14、15の両日、共同案内所を置く。「西口の東武、東口の西武」と言われ、ライバル関係にある両者が手を握るのは初めてという。(『朝日新聞』2008年06月14日)

②も動作がなくても「盟を結ぶ」と言う意味が成り立つから、メトニミーに基づくメタファー表現である。

### (5) 手を上げる

①候補として名乗りでる。 例：一方で、「東京がもう1回手をあげるかは議会と相談して決める」とも話し、任期内に一定の方向性を打ち出す考えも示唆した。都庁で報道各社の質問に答えた。(『朝日新聞』2009年10月15日)

この意味項目において実際に動作が伴われなくても使えるから意味が定着し、メトニミーに基づくメタファー表現である。

②暴力を振るう。 例：生活に追われた無学な親が、他に対処法を知らず子供に手をあげる。自分愛する大切さ知る。(『朝日新聞』2010年03月05日)

この意味項目において動作性がかなり強く、時間的隣接関係に基づくメトニミー表現である。

③閉口して途中で投げ出す。降参する。 例：「母親の愛情は、子供等のいたいけな姿をいとほむるやうな、弱々しい情緒ではなく(中略)悦も憎も腹立も、悲しみも、すべてが真剣になり、本気になり、我ともなく手をあげる程の烈しい情熱にもなります」(『朝日新

聞]「声」2009年05月10日)

③は今ではかなり定着しているが、もともとは降参するとき、手を上げるという具体的な動作を伴う場合が多いため、最初はメトニミーが基盤となっている。それゆえ、メトニミーに基づくメタファー表現である。

以上の五つの慣用表現には複数の意味があり、異なるメタファー、メトニミーが関わっていて、異なる意味へと拡張していることが分かる。

## 5. 中国語における「手」の比喩表現

以下に中国語の例を〈 〉に示し、( ) 内に日本語の直訳と意識を付す形で示す。

### 5.1 「手」自体のメタファー表現

#### ①手段、やり方、技

〈手黒〉(手が黒い—手口がひどい)、〈心狠手辣〉(心が残忍で、手が辛い—心が残忍で手口があくどい。残酷無情である。)

#### ②数量詞として用い、能力、腕前、技能などを数える

〈他真有两手〉(彼は本当に両手を持っている—彼は相当能力がある)

〈她写得一手好字〉(彼女はよい字を書くことができる—一本の腕を持っていう—彼女は字がうまい)

下線部は中国語では数量詞であり、能力を表す場合に使われる。文中で、日本語の「うまい」、「相当能力がある」と言う意味に当たる。

### 5.2 「手」自体のメトニミー表現

#### ①特殊な技術を持っている人。またある仕事をする人、働きたい手

〈歌手〉(歌手)、〈选手〉(選手)、〈水手〉(水夫)

#### ②手で人を表す

〈新手〉(新人、新米)、〈老手〉(腕利き、ベテラン)、〈生手〉(新米)、〈好手〉(やり手)、〈高手〉(達人)、〈一把手〉(やり手、最高責任者、トップ)、〈帮手〉(手助けする人)、〈扒手〉(すり)、〈对手〉(相手)、〈缺人手〉(人手が足りない)、〈打下手〉(した働きをする)

#### ③手で所有を表す表現

〈失手〉(手を滑らす)、〈到手〉(手に入れる)、〈落到手里〉(手に落ちる)、〈脱手〉(手から離れる)、〈脱手〉(他方に渡す)、〈插手〉(手を出す)、〈握在手里〉(～を手握る)

〈失手〉は日本語の「手を滑らす」と訳されているが、中国語ではよく試合の場合得点を失う場合や何かをするときミスする場合などによく使われているから、抽象的なものにも使い、「所有を失う」と意味であるから「手」で「所有」を表す表現である。

### 5.3 手を用いた熟語に関わる比喩表現

手を用いた熟語としての比喩表現を以下の3パターンに分けて分析していく。

## A 二字熟語 「手+形容詞」のパターン

手軟（手が柔らかい—手を下すに忍びない、手加減する）  
 手生（練習などを怠り、手がなまっている）  
 手痒（手がかゆい—腕がむずむずする、手を出したい気持ちにかられる）  
 手重（手が重い—力を入れすぎる、手荒い）  
 手轻（軽い手—そっと扱う）  
 手长（手が長い—盗み癖がある）  
 手短（手が短い—人からものをもらったりして、公正に事を運べない）  
 手快（手が早い—物事をするのがてきぱきである、すぐ女性に関係を持つ、すぐ暴力振るう）  
 手慢（仕事のがのろい）  
 手紧（けちんぼである、しまり屋である、また手元不如意の意）

表の中の表現は「手+形容詞」のパターンであり、表現全体として抽象的な意味へと拡張し、メタファー表現である。その中、〈手軟〉の例は次のようなものがある。例：〈対凶犯不能手軟。〉「極悪犯に対しては手加減してはならない。「手が柔らかい」全体で「手が下せない、手加減する」を表すメタファー表現である。

また、〈手重〉の例として次のものが挙げられる。例：〈因为手重，把玩具给捏坏了。〉（手に力を入れすぎておもちゃをつぶしてしまった。）「手が重い」で「手を入れすぎる」を表し、全体のメタファー表現である。

## B 四字熟語のパターン

碍手碍脚（邪魔になる、手足まといになる）  
 白手起家（裸一貫で身代を築きあげる）  
 搓手不及（手を下すいとまがない、処置が間に合わない）  
 大手大脚（金遣いが荒い）  
 蹑手蹑脚（抜き差し差し足）  
 眼高手低（眼識は高いが自分にはできない）  
 袖手旁观（何もしないでただ見ている）

以上の表現は中国語の四字熟語であり、全体としてはメタファーであるが、動作がイメージできるので、メトニミーに基づくメタファー表現である。

## C 〈手足〉（兄弟、また兄弟のように親しい人間関係）

〈手足〉は「手」と「足」が身体の重要な部分として、いずれも必要不可欠であり、緊密な関係にあるという中国の古くからの「統合的思想」に基づいていると考えられる。「手」と「足」という身体部位の関係で人間の親しい関係を言うから、メタファー表現である。

## 6. まとめ

日本語も中国語も「手」自体のメタファー表現において、手で「手段、方法」「能力」を表せる。それは、やはり、「手」の機能からのメタファーは似ているからだと考えられる。

ただ日本語には「手」で「世話」「手数」を表す表現があるが、中国語には見当たらない。

「手」自体のメトニミー表現において日本語も中国語も「手」で「人」を表す表現、手で「所有」を表す表現があり、これは両言語が共通している点である。しかし、日本語の「手」は「方向」「種類」「材質」「傷」を表現できるのに対し、中国語にはこのような表現がない。日本語において「手」の隣接性によるメトニミー表現は中国語より豊かであることが窺える。

「手」を用いた慣用表現の比喩表現については日本語に「メトニミーに基づくメタファー表現」が「メトニミーとメタファー両方関わる表現」やメタファーによる意味拡張より多いと言える。中国語も「手」が用いられた四字熟語の中では、「メトニミーに基づくメタファー表現」がほかのパターンより多い点も両言語に共通している。

また、日本語には一つの慣用表現には複数の抽象的な意味を持つ場合が多く、それぞれ違う比喩が関わっていることが明らかになった。一方、中国語の「手」の四字熟語は一つの表現はほぼ一つの意味を持ち、複数の比喩のパターンが関わることは少ない。

これまでの分析から見ると、日本語も中国語も「手」を用いた比喩表現が多く見られるが、日本語の「手」は中国語の「手」より様々な意味へと拡張し、もっと具象的であるということが分かった。その理由はまた次の課題として明らかにしていきたい。

### 【参考文献】

- Barcelona, Antonio (2000) On the plausibility of a metonymic motivation for conceptual metaphor. In: A. Barcelona (ed.) *Metaphor and Metonymy at the Crossroads*, 31-58. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, George & Johnson Mark (1980) *Metaphors we live by* University of Chicago press (邦訳: 渡辺昇一・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous things: what categories reveal about the mind*, University of Chicago press, 1987
- Lakoff, George (1993) *The Contemporary Theory of Metaphor In Andrew Ortony ed., Metaphor and Thought*, second edition, Cambridge University Press, 1993
- Langacker, R.W. (1993) "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics* 4, pp.1-38.
- 有蘭智美 (2005) 「身体部位(「手」、「口」)を含む慣用表現の意味分類」『日本認知言語学会論文集』(第5巻) 日本認知言語学会 pp.487-497
- 大塚容 (1994) 「日本語身体言葉における身体部位の比喩的機能」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』
- 河上誓作 (1996) 「カテゴリー化と認識」『認知言語学の基礎』 研究社
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義語の記述」 楠孝編 『メタファー研究の最前線』 ひつじ書房
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー—』 研究社
- 土屋智行 (2009) 「慣用表現に関わる変形操作とその動機づけ—『目・手』を含む慣用表現の

- 関係節化を例に一』『日本認知言語学会論文集』（第9巻）日本認知言語学会  
辻幸夫（2003）『認知言語学への招待』（第1巻）大修館書店  
松中完二（2002）「現代多義語の構造」『現代日本語講座 第4巻語彙』明治書院 pp.129-51  
舩山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』町田 健編 研究社  
舩山洋介・深田智（2003）「意味の拡張」『認知意味論—シリーズ認知言語学入門』（第3巻）  
大修館書店  
舩山洋介（2009）『日本語表現で学ぶ入門からの認知言語学』研究社  
山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会  
吉村公宏（2004）「メタファー・メトニミー」『はじめての認知言語学』研究社  
楊芷蕓（2009）「日中身体語彙の認知的意味拡張」——『手』、『足（脚）』を中心に  
（銘伝大学応用日本学科修士ethesys.lib.mcu.edu.tw/ETD-db/ETD-search/getfile?URN=etd.）

### 【参考辞書類】

- 国広哲弥（1997）『理想の国語辞典』大修館書店  
大東文化大学中国語大辞典編纂室（1994）『中国語大辞典』角川書店  
東響吉男（2003）『からだことば辞典』東京堂出版  
日本国語大辞典第二版編集委員会（2001）『日本国語大辞典（第二版）』小学館  
北京对外経済貿易大学・北京商務印書館（2003）『大活字版 日中辞典』小学館  
朝日新聞『聞蔵Ⅱ』

（チン・エイタク）